岡山大学大学院教育学研究科研究集録　第188号（2025）47－56

地域社会とグローバルをつなぐ和楽器音楽次世代育成の実践研究（２）

― 国際文化交流における「異文化間能力」育成の可能性 ―

早川　倫子　・　髙須　裕美　・　清水　尚子*　・　山路　みほ**　・　別府　祐子***
樋口　亜希****　・　中村　　愛*　・　三好　啓子*****　・　土佐　千紘*****
花草　容子******　・　竹下　則子*******

本研究は，地域社会とグローバルをつなぐ和楽器音楽次世代育成の実践研究の一環として実施した「おかやま国際和楽器学生フェスティバル」について，「異文化間能力」育成の視点からその可能性について検討したものである。

国内の学生については，①和楽器を介した繋がり／音楽的な協働，②演奏の質に関する違いの認識，③ 海外の和楽器演奏者に対する認識の３点が，海外の学生については，①表現スタイルや技術に関する違いの認識，②和楽器音楽の本質の理解，③演奏者としての学びと成長に対する意識の３点が，特徴として示された。「異文化間能力」の視点からは，国内外共に「文化的多様性」と「絶対的正統性の緩和」についての認識が認められ，柔軟で且つ寛容な和楽器との向き合い方が形成されていたことが明らかとなった。また「共感・協働のスキル」については，特に国内の学生に多く認められる結果となった。

Keywords：和楽器音楽，異文化間能力，グローバル，次世代育成，質問紙調査

岡山大学学術研究院教育学域　700－8530　岡山市北区津島中３－１－１
*兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科博士課程（岡山大学所属）　700－8530　岡山市北区津島中３－１－１
**箏曲演奏家
***倉敷短期大学保育学科　711－0937　倉敷市児島稗田町160
****岡山県立岡山聾学校　703－8217　岡山市中区土田51番地
*****岡山大学大学院教育学研究科修士課程　700－8530　岡山市北区津島中３－１－１
******兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科研究生（岡山大学所属）　700－8530　岡山市北区津島中３－１－１
*******びわこ学院大学　527－8533　東近江市布施町29

Classical Japanese Instrument Music: Connecting Local Communities and the Global World (2) – Developing ‘Intercultural Competence’ in Next Generation Cultural Exchange –

Rinko HAYAKAWA, Hiromi TAKASU, Naoko SHIMIZU*, Miho YAMAJI**, Yuko BEPPU***, Aki HIGUCHI****, Ai NAKAMURA*, Keiko MIYOSHI*****, Chihiro TOSA******, Yoko HANAKUSA******, and Noriko TAKESHITA*******
Faculty of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530
*Doctoral Student at the Joint Graduate School in Science of School Education Hyogo University of Teacher Education (Okayama University), 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530
**Koto Player
***Department of Early Childhood Education and Care, Kurashiki City College, 160 Hieda-cho, Kojima, Kurashiki 711-0937
****Okayama Prefectural School for the Deaf, 51 Tsuchida, Naka-ku, Okayama 703－8217
*****Master’s Student at the Graduate School of Education in Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530
******Research Student at the Joint Graduate School in Science of School Education Hyogo University of Teacher Education (Okayama University), 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530
*******Biwako-Gakuin University, 29 Fuse-cho, Higashiomi, 527-8533

Ⅰ．はじめに

本稿では，地域社会とグローバルをつなぐ和楽器音楽次世代育成の実践研究の一環として実施した「おかやま国際和楽器学生フェスティバル」について，「異文化間能力」育成の視点からその可能性について検討する。「地域社会とグローバルをつなぐ和楽器音楽次世代育成の実践研究（１）『おかやま国際和楽器学生フェスティバル』外的評価の分析」の継続研究である。

近年の我が国の邦楽人口の減少による和楽器文化や和楽器産業衰退の状況を鑑みると，和楽器文化の「普及」・「伝承」・「継承」とは何か，次世代育成のあり方を考えていくことは急務である。そのような中で着目したのが，海外の教育機関における和楽器音楽と教育の「普及」の状況についてである。特に海外の若い世代が，和楽器の何に魅力を感じているのか，どのように和楽器を学習しているのか，和楽器による国際文化交流を通して和楽器文化の本質を考え直したいというところに至った。

国際文化交流の実践にあたっては，岡山を拠点として，海外の教育機関等における和楽器の学習者・研究者と，岡山地域の子供たち・学生・教職員との交流の場を作ること，そして和楽器をプラットフォームとして岡山を異文化間対話の発信地となるよう目指すとともに，次の点を特徴として示した。

第一に，和楽器をプラットホームとした国際文化交流の研究推進の場が，東京や大阪などの大都市ではなく，岡山という地域発信型である点，次世代の和楽器文化を担う青少年を対象とした実践研究である点である。国際文化交流への国内外からの参加者は，小学生から大学生までの若い世代が主体であることと同時に，アジアやヨーロッパからの学生が参加することは特記すべきことである。地域発信型の次世代育成のための国際和楽器文化交流という点で，本研究はローカルとグローバルをつなぐ新しい実践研究である。

第二に，音楽領域における「異文化間能力」モデルの実践研究として先駆的なものであり，本実践研究を起点に，世界の見本となる実践モデルを構築する点である。

文化交流の場を研究するにあたって，本研究は論理的枠組みとして多文化共生のための「異文化間能力」モデルを適用する。これは1997年にByramによって提唱され，グローバル化が急激に進む中，世界中の教育に大きな影響を与えてきた。2018年の欧州評議会（Council of Europe）においても，RFCDC（*Reference Framework of Competences for Democratic Culture; Volume 2 descripters of competence for democratic culture*：民主的な文化への能力参照フレームワーク：第２巻　民主的な文化へのディスクリプター）が発表され，未来の子供達が多文化社会の中で能動的で責任ある社会人に成長していくための能力を，「民主的な文化への能力（Competences for Democratic Culture）」とし（櫻井ら，2021），モデル図が示されている。それは，「価値観」「態度」「スキル」「体型的な知識と批判的な理解」と20の下位項目（能力）から構成されている（Council of Europe, 2018, p.38）。特にロシア・ウクライナ戦争勃発以降のヨーロッパにおいて，この「異文化間能力」は，文化と教育の場で重要視されている。

Ⅱ．異文化間能力について

１.文化の定義と本研究の立ち位置

異文化間能力の文化の定義について明示されたものは少ないが，特定の社会や集団に共有される物事の総体としての意で包括的な文化の定義が多くの研究に共有されている（中尾，2019，2023）。

本研究で取り扱う「文化」は，上述した広義の意味での文化である様々な背景を持つ国内外の学生が，狭義の意味での文化である「和楽器」という共通の媒体およびそれによる行為を対象とする。すなわち，和楽器音楽という文化的実践（行為）において，それぞれの文化的背景の異なる学習者たちがどのように交流し何を身につけるのか，「異文化間能力」の視点から検討する

２．異文化間能力の概念と動向

異文化間能力（Intercultural Competence）については，「異文化間コミュニケーションに必要とされる言語的知識や技能に加えて，異文化に関する知識，異文化への態度，異文化思考スキル等を含む異文化対応能力」（稲葉，2023）として，研究が進められているものが多い。

前述した1997年に提唱されたByramの「異文化間能力」モデル（A Model for Intercultural Communicative Competence）[1]では，異文化間コミュニケーションの要素として，「態度（Attitudes（savoir être））」,「知識（Knowledge（savoirs））」「解釈・関連付けのスキル（Skills of interpreting and relating（savoir comprendre））」,「発見・やり取りのスキル（Skills of discovery and interaction（apprendre/faire））」,「批判的文化アウェアネス（Critical cultural awareness（savoir s’engager））」の５つを挙げている。

それまでの「異文化間能力」については言語コミュ

ニケーションレベルで検討されること多かったが，Byramのモデルは，母語やそれ以外の言語に頼らない社会的・文化的コミュニケーション能力を指しており，特に現代の世界状況や社会において重要視される所以である。

異文化間能力に関連する研究には，Byramの異文化間能力の発展させたDeardorff（2006）がある。Deardorff（2006）では，異文化間能力ピラミッドモデルが作成され，それは４つの段階に分かれている。底辺には「必要とされる態度」がある。そして，その１つ上のレベルに「知識と理解」と「スキル」が位置しており，それらは相互に影響を与えるとされている。さらにその上には「期待される内的成果」があり，最上段には「期待される外的成果」がある。このモデルの基本的な出発点となるのは「態度」であり，「態度」から出発して段階的に異文化間能力が習得され，最終的には「外的成果」に到達するという構成になっている（石﨑，2023）

この理論的背景に基づき，DeardorffとArasaratnam-Smith（2017）は，異文化間能力の育成に関する各国の実践事例を集め，国際化に対する新たな視点を提供するとともに，グローバルに通用する学生の育成に向けた実践的なケーススタディを提示した。彼らは，高等教育における異文化間能力の重要性を強調し，特にアカデミックな教育における多様性の統合には，文化的謙虚さと異文化間能力育成における共感の重要性が不可欠であると指摘している。

本研究では，こうした流れの中で精査されてきた「異文化間能力」について，先に示したRFCDCの４つの視点に基づき検討していく。

３．本稿における「異文化間能力」育成と検証の視点

本稿では，以下の表１の通り，「異文化間能力」モデル４点をもとに，本実践研究での目的を関連づけ，さらに異文化間能力検証の視点として表２の通り設定した。次章では，「おかやま国際和楽器学生フェスティバル」に参加した岡山県内の大学生を対象とした質問紙調査の回答を分析し，和楽器をプラットホームとした国際文化交流の場における異文化間能力育成の可能性について検討する。

表１　異文化間能力モデルと本実践の目的

異文化間能力モデル	本実践の目的
①知識（自文化・他文化に関する知識）	岡山の子供たちと学生にとっては自文化となる和楽器音楽を知り，さらに越境文化として存在している海外の和楽器による音楽に触れることで文化的多様性および多文化共生に対する知識と価値観を構築する。
②態度（多様な文化差異への好奇心やオープンさ）	参加する学生と教職員にとっては自国のものと認識される音楽を，外国人の演奏によって他者化することによって文化差異に対する寛容性を育成する。また，外国人和楽器学習者にとっても日本人を聴衆として，あるいは共演者として演奏することで文化差異を認識する。
③共感と協調のスキル（他文化を自文化と結びつけ，実際のコミュニケーションの中で自身の知識・態度等を使える力）	フェスティバルという文化活動に実際に関わることで多文化のコンテクストの中で協働を経験し，そのプロセスの中で共感と協調のスキルを形成する。
④批判的文化アウェアネス（自文化・他文化の知識と差異を批判的に評価する力）	上記すべての経験により，その後の世界についての体系的な知識獲得と批判的アウェアネスへのモティベーションを形成する。

表２　本稿における異文化間能力検証の視点

①和楽器音楽における文化的多様性，特に世界各地における越境文化としての和楽器音楽および海外学習者による国内の邦楽に対する知識および価値観の変化を検討する。
②和楽器音楽文化の異なりに対する寛大さの変化，特に，国外での和楽器音楽教育と学習に対する理解と国内の邦楽における絶対的正統性の緩和がどのように示されているかを検討する。
③協働の場を通して和楽器音楽に対する共感と協調のスキルがどのように形成され，あるいは変化したかを検討する。
④和楽器による国際交流の参加の経験によって，世界についての体系的知識と批判的理解，さらには将来的な知識取得と理解力開発へのモティベーションがどのように形成され，あるいは変化したかを検討する。

Ⅲ．質問紙調査の概要

１．対象

「おかやま国際和楽器学生フェスティバル」に参加した国内外の学生を対象とした。内訳は以下の表３の通りである。

表３　国内外の学生の回答者内訳

岡山大学	15名
シンガポール国立大学	６名
フィリピン大学	６名
ジャンティイー公立音楽院（仏）	３名
チャイコフスキー記念国立モスクワ音楽院	１名

回答は「おかやま国際和楽器学生フェスティバル」の期間中に開催した「フェスティバルコンサート」終演後に実施した。

なお，調査にあたっては質問紙調査用紙に研究の一環として実施する旨記載し，回答は任意であること，回答することで調査への参加へ同意したこととする説明文を記載し，口頭説明をして実施・回収した。日本語版と英語版の両方を用意している。氏名等の個人情報は収集していない。回答者数は，31人であった。

２．設問項目

設問内容は，主に「日常の和楽器の取り組み」に関するもの（設問１～７）と，「おかやま国際和楽器学生フェスティバル」での他者との共演や意義を問う項目（設問８～14）で構成される。

具体的な設問項目は以下の表４の通りである。

表４　質問紙における設問項目（国内外学生共通）

1	どの国で和楽器を勉強していますか。○をつけてください。 日本・シンガポール・フィリピン・フランス・ロシア
2	何の和楽器を習得していますか。あてはまるもの全てに○を付けてください。 箏・三絃・胡弓・太鼓・尺八
3	何歳の時にその和楽器を始めましたか。それぞれの和楽器ごとに，空欄に記入してください。 （　　）歳　（和楽器名：　　）
4	今回のフェスティバルで演奏する和楽器について，なぜ学ぼうと思いましたか。あてはまるもの全てに○をつけてください。 和楽器の演奏を聴き，興味をもった･和楽器の歴史を知り，興味をもった・先生や友人に勧められた・その他
5	今回のフェスティバルで演奏する和楽器について，その和楽器の魅力はどこにあると考えていますか。あてはまるもの全てに○をつけてください。 音色・楽曲・和楽器の歴史・和楽器の見た目・演奏する姿・その他
6	今回のフェスティバルで演奏する和楽器について，日頃どのような方法で和楽器を勉強していますか。あてはまるもの全てに○をつけてください。 独学で勉強している・学外でお稽古を受けている・学校等で授業を受けている・その他
7	今回のフェスティバルで演奏する和楽器についてお答えください。①～④の項目（①音色，②演奏技法，③演奏の際の姿勢，④和楽器・楽曲の歴史や文化）について，日頃どの程度意識して演奏に取り組んでいますか。最もあてはまるものをそれぞれ1つだけ選び，○をつけてください。 とても意識している・少し意識している・あまり意識していない・全く意識していない
8	他の国や他の流派の演奏者の演奏について，共演したり演奏を聴いたりする中でどのような感想（例：国の違い，流派の違い）を持ちましたか。自由に記述してください。
9	共演する際に，どのようなことを意識しましたか。あてはまるもの全てに○をつけてください。 共演者の演奏をよく聴くこと・共演者と息をあわせること・共演者とテンポをあわせること・その他
10	ワークショップや練習の中で，演奏に関して共演者とのコミュニケーションはどのようにとろうと考えましたか。あてはまるもの全てに○をつけてください。 言葉・演奏・ボディランゲージ・その他
11	一人で演奏する際との違いを感じましたか。どちらかあてはまる方に○をつけ，「違いを感じた」と答えた場合，どのような違いを感じたか，具体的に記述してください。 違いを感じた（理由）・違いを感じなかった
12	今回のフェスティバルを経て，自らの演奏に変化を感じましたか。どちらかあてはまる方に○をつけ，「変化を感じた」と答えた場合，どのよう変化を感じたか，の中に具体的に記述してください。 変化を感じた（理由）・変化を感じなかった
13	今回のフェスティバルを経て，今後どのようなことに意識して演奏に取り組んでいきたいですか。自由に記述してください。
14	その他，感想等自由にお書きください。

３．分析方法

本研究における調査全体を通して，各設問内容及び回答形式に合わせて，基礎統計量の分析，KHコーダによるテキストマイニング，キーワード／概念抽出によるアフターコーディングの手法を用いた。分析にあたっては，データ番号を付与して行い，個人情報は取り扱っていない。

なお，本稿では，「異文化間能力」の視点に特に関連する設問８，設問12，設問13，設問14を取り上げ，基礎統計量と概念抽出によるアフターコーディングによる分析を行った。

Ⅳ．質問紙調査の分析結果

１．国内の学生

まず，国内の学生についてである。国内の学生の関連設問に対する回答は，以下の表５の通りである。

表５の回答を分析すると，国内の学生の回答は，以下の３点に分類される。

①　和楽器を介した繋がり／音楽的な協働（波線）

今回のフェスティバルは，様々な国や流派の演奏者が集まり共に演奏するという，非常に貴重かつ類をみない実践となった。実践を経て，他の国や他の流派の演奏者の演奏について，共演したり演奏を聴いたりする中でどのような感想を持ったか質問項目８にて回答してもらったところ，「国」や「違い」に対して，「国は違っても学ぶことは同じ」(ID:8)，「国や流派がちがっても，和楽器を通してつながることができると感じた」(ID:2) や，「国が違っても演奏はそろうのが不思議なかんじがした」(ID:9) 等，違いを感じつつも，同じ和楽器の演奏を通して，繋がりや共通性を感じていることが読み取れた。国や文化的背景の違いがあることを認識し，理解した上で，各々が「演奏」という手段をとおして何らかの共通の意識を共有していたことが分かる。

表５　国内の学生の自由記述内容

設問番号	ID	国内の学生の自由記述	キーワード/概念抽出
8	1	・国の違い	国の違い
	2	・国や流派がちがっても，和楽器を通してつながることができると感じた。皆さん本当にお上手で共演できて光栄でした。	国や流派の違い 和楽器を通してつながる
	3	・日本国内でも西日本と東日本で重んじられる傾向が異なったり，力の入れ具合を感じ取ることができた	重んじられる傾向が異なる 力の入れ具合
	4	・外国の人は激しさがあった	外国の人の激しさ
	5	・海外の人は勢いのある演奏をされる方が多いように感じた。	海外の人の勢いのある演奏
	6	・空気や間の違いを感じた。	空気や間の違い
	7	・勢いがすごい，ちゅうちょ（原文ママ）のなさが音にも	勢い，躊躇の無さ
	8	・国は違っても学ぶことは同じ	国の違い，学ぶことは同じ
	9	・国が違っても演奏はそろうのが不思議なかんじがした。	国の違い，演奏はそろう
	10	・日本以外でも和楽器を学んでいる人がいることに驚いた。	日本以外の和楽器の学習者
	11	・そんなに違いはなさそう	違いはない
	12	・他国の人の方がすごくて，日本人として恥ずかしくなった。	他国の人の方がすごい 日本人として恥ずかしい
12	13	・この２日ですぐ変化したわけではないけれど，技法や姿勢等変えていきたいところが見つかった。	技法や姿勢等を変えたい
	14	・人についていく力がついた	人についていく力
	15	・音楽のテンポに合わせることができた。	音楽のテンポに合わせる力
	16	・テンポが上がった。	テンポが上がる
	17	・刺激を受けて進歩した	刺激を受け進歩
	18	・すばらしい演奏をきき，より和楽器に興味をもった。	素晴らしい演奏，和楽器に興味
	19	・指導の際先生がおっしゃっていた呼吸を意識するようになった	呼吸の意識
	20	・周りの音をよく聴くようになった。	周りの音をよく聴く
13	21	・周りの音をしっかり聞いて，一緒に演奏している人たちと息を合わせようと思います。	周りの音をよく聴く 息を合わせる
	22	・自分自身が楽しんで演奏していきたい	楽しんで演奏する
	23	・音色だけでなく，演奏する姿勢や心もちも，もっときれいにしていきたい	演奏する姿勢や心持ち もっときれいにしたい
	24	・大人数の中でも音質や技法，姿勢にこだわって練習していきたい。	音質や技法，姿勢 こだわった練習
	25	・ニュアンスの違いを感じて調和させる	ニュアンスの違い，調和させる
	26	・お琴以外でも息を合わせることを意識したい。	息を合わせることの意識
	27	・これで授業は終わるが，日本の古楽器がこんなにもたくさんの国の人々に親しまれていることを知り，嬉しかった。	海外の人に親しまれていることを知る，嬉しい
	28	・専門外の楽器でも気軽にチャレンジすること	専門以外の楽器に挑戦
	29	・自分の演奏はもちろん，周りの演奏も含めて聞く	周りの演奏を聴く
	30	・暗譜をしている人も多く，自分ももっと一曲一曲に時間をかけて丁寧に練習したいと思った	時間をかけた丁寧な練習
	31	・周りと合わせることを意識して練習したいです。	周りと合わせることの意識
	32	・他の国の伝統的な楽器についても学びたい	他の国の伝統的な楽器 学びたい
	33	・他者意識	他者意識
14	34	・違う国でも日本の音楽に興味をもって練習してくれる方々がいると知り，嬉しかったです。	違う国でも日本の音楽に興味 嬉しい
	35	・この度は，邦楽部も参加させていただき，ありがとうございました。なかなかないこのような機会に参加でき，光栄でした。様々なことを先生方や学生さんから学んだので，今後の演奏に生かしていきたいです。	機会に参加，光栄 今後の演奏に活かしたい
	36	・日本以外の国の人の箏の演奏者の多さや上手さに驚いた。和楽器が広く親しまれていることを嬉しく思い，自分も大学を卒業しても箏をつづけたいと思った。	日本以外の国の人の箏の演奏者の多さ，上手さに驚き 嬉しい，箏を続けたい
	37	・他の国の方と交流することがあまりないので楽しかったです。素敵な機会をありがとうございます。	他の国の人との交流 楽しい，素敵な機会
	38	・先生方の演奏，すばらしすぎました。ありがとうございました。	先生方の演奏，素晴らしい

また，質問項目12及び質問項目13の回答にて，「周りの音をよく聴くようになった」（ID:20）や，「周りの音をしっかり聞いて，一緒に演奏している人たちと息を合わせようと思います」（ID:21）等，他の演奏者との共演を経て，自らの演奏や考えに変化があったことを読み取ることができた。共演する際にどのようなことを意識したかという質問項目９では，「共演者の演奏をよく聴くこと」（９人），「共演者とテンポをあわせること」（９人）を選択した回答者が多かった。また，「言葉」，「ボディランゲージ」，「演奏」等様々な方法を組み合わせながら他の演奏者とコミュニケーションをとろうとした回答者の様子も窺うことができた。他の演奏者とコミュニケーションをとり，それぞれの違いを乗り越え，互いを理解しようとしていたことが窺える。

以上から，同じ和楽器を演奏する者だという認識が，国や流派の垣根を越えて，演奏者同士を結び付けていたことが分かる結果となった。他者との共演の中で様々な演奏に触れ，共演する楽しさや難しさ等，一人で演奏する際との違いを感じながら，自らの演奏について考える機会を提供する場となった点でも，本フェスティバルが意義のあるものであったと考える。

② 演奏の質に関する違いの認識（二重線）

今回，様々な背景をもつ演奏者と一緒に共演する中で，自らの演奏と比較し，違いを感じたことについて記載した回答もあった。具体的には，「勢いがすごい，ちゅうちょ（原文ママ）のなさが音にも」（ID:7），「海外の人は勢いのある演奏をされる方が多いように感じた」（ID:5）や，「外国の人は激しさがあった」（ID:4）といった，演奏の質的な違いへの気づきに関する記述がよく見られ，特に海外から参加した演奏者に対して，「激しさ」や「勢い」を感じた回答者が多かったようである。

それに付随する形で，質問項目12の「今回のフェスティバルを経て，自らの演奏に変化を感じたか」という質問項目に対し，「テンポがあがった」（ID:16），「人についていく力がついた」（ID:14）という回答があったことから，特に海外から参加した演奏者の演奏から違いを見出し，それに対して自らの演奏について考え，共演の際に違いを意識しそれに合わせようとした様子が分かる。自らが演奏する，もしくは演奏を聴く機会を通して，音楽の多様性を感じた演奏者も多かったのではないだろうか。

一方で，「指導の際先生がおっしゃっていた呼吸を意識するようになった」（ID:19），「音色だけでなく，演奏する姿勢や心持ちももっときれいにしていきたい」（ID:23）といったように，和楽器音楽の本質に関わる認識の深まりも読み取れた。

③ 越境文化としての価値観の変化（グレー）

海外の和楽器演奏者に関する内容には，「日本の古楽器がこんなにもたくさんの国の人々に親しまれていることを知り，嬉しかった」（ID:27）「違う国でも日本の音楽に興味をもって練習してくれる方々がいると知り，嬉しかったです」（ID:34）「日本以外の国の人の箏の演奏者の多さや上手さに驚いた。和楽器が広く親しまれていることを嬉しく思い，自分も大学を卒業しても箏をつづけたいと思った」（ID:36）等，和楽器が自国以外でも広く受け入れられ，演奏されていることを肯定的に捉えた回答が非常に多くみられた。

一方で，「他国の人の方がすごくて，日本人として恥ずかしくなった。」（ID:12）といった回答もみられたことから，海外から参加した演奏者との交流を通して，改めて自国の伝統楽器について考えるきっかけとなったのではないだろうか。

また，「すばらしい演奏をきき，より和楽器に興味をもった。」（ID:18）「他の国の伝統的な楽器についても学びたい」（ID:32）といった回答もあり，自国の伝統文化の魅力を再認識するとともに，他国の伝統文化に対する興味がわいた回答者もいたようである。今回のフェスティバルが単なる共演の場に留まることなく，文化継承への貢献につながる可能性も考えられる。

２．海外の学生

次に，海外の学生についてである。海外の学生の関連設問に対する回答は，以下の表６の通りである。

表６の海外の学生の回答を分析すると，以下の３点に分類される。

① 表現スタイルや技術に関する違いの認識（二重線）

海外の学生の回答からは，演奏スタイルや技術，さらには文化的な違いに関して，多角的な観察と気づきを得ていることが分かる。

例えば，演奏スタイルについては，技術的な側面における糸の弾き方や音の揺れをなどに違いがあることを指摘している（ID:42）。特に，箏の流派だけではなく，指導者によっても異なるという気づきが多い（ID:43，46，47，51，52）。これらは，同じ楽曲であっても，指導者の演奏スタイルや解釈の違いが演奏に現れることを示唆している。特に沢井流の演奏スタイルについては，速いテンポで演奏されて

表６　海外の学生の自由記述回答

設問番号	ID	海外の学生の自由記述	キーワード/概念抽出
8	39	・I noticed differences in playing styles that is probably because of the difference in the koto institute our senseis went to and studied.	演奏スタイルの違い，指導者の学んだ教育機関の違い
	40	・Sawai style, people play very fast and their technique were amazing, and the pronunciation was very good for a non-Japanese speaker.	沢井流，演奏が速い，テクニックが素晴らしい，発音が良い
	41	・They were all incredible! I loved hearing the sound of their koto.	皆さん素晴らしい，箏の音色が大好き
	42	・I think everyone have different experiences and discipline, but one thing that I have noticed is that some player that pulling the string technique is very different.	経験や訓練の違い，糸を弾くテクニックの違い
	43	・There are some differences in how they play their instruments (technique,etc), especially the teachers in their interpretation of the music pieces.	楽器の演奏方法（テクニックなど）の違い，指導者の曲の解釈の違い
	44	・It is amazing how people from other countries with other cultures can play Japanese traditional music with such differently. They have a great sense of style.	他の国の文化を持つ人，日本の伝統音楽を違った方法で演奏できる，素晴らしいスタイルの感覚
	45	・I think it was fun and I got to see real Japanese masters of Koto.	楽しい，日本の本当の名人の演奏
	46	・Yes, everyone style is different even after learning from the same teacher your style is always different.	同じ先生から習っても，スタイルは違う
	47	・It was an extremely heartwarming experience to connect with people of different cultural backgrounds through music. While I am not too sure about the differences in musical style between schools, I noticed the way Rokudan was taught was slightly different from the way which I was taught, for example the speed of pitch-bending.	音楽を介する，異なる文化的背景，繋がる，心温まる経験，音を弾いた後に音程を上げるまたは下げる揺れ（ピッチベンディングのスピード），教わった方法との違い
	48	・I'm a percussionist so this is quite different from what I usually do.	打楽器奏者，普段と異なる
	49	・It was fun but also hard to communicate efficiently during rehearsals due to the difference in language.	楽しかった，言語の違い，コミュニケーションの難しさ
	50	・Japan is generally more disciplined and uniform in their movements and formalities.	日本，動きや形式，規律，統一
	51	・Our sensei have different styles so sometimes the mindsets are different. Some techniques are a little different, but they achieve similar sound.	指導者のスタイルと考え方の違い，テクニックの違い，同じ音を達成
	52	・Everyone are very good at playing. Japanese students tend to sit differently from students in my country, due to different schools the instruments were from.	演奏が上手，日本の学習者，流派が異なる，異なる座り方
	53	・I am impressed by listening to big group performance.	大勢のグループの演奏，感動
12	54	・I was able to apply what I have learned from the workshops and rehearsals.	ワークショップ，リハーサル，学んだことを実践
	55	・We have to be very concentrated, to be pay attention to others body language and breathing.	ボディランゲージ，呼吸，注意を払う，集中する必要
	56	・I am more mindful of my breath and sense of perfect rhythm.	呼吸と完璧なリズム感，もっと気を配る
	57	・Definitely, now that I am exposed to many koto players, I feel inspired doing Rokudan feel more calm, and I have more resolve to foers learning the rest of Rokudan.	多くの奏者，インスピレーションを感じた，学ぶ決意
	58	・I feel that I should understand and better interpret how the piece should sound like, and play the piece such that the desire atmosphere and the song's meaning are brought out.	曲の理解，解釈 曲の意味を引き出す演奏の必要性
	59	・My teamwork sense is better now.	チームワークの感覚，向上
	60	・I stribe the koto strings differently, producing a bright sound rather than a harsh sound.	箏の糸の弾き方を変える，耳障りな音より明るい音へ
	61	・I started playing more gently.	より優しく演奏
	62	・More intentional playing.	より意図的な演奏
	63	・I was able to relax while playing certain pieces.	特定の曲，演奏，リラックス
	64	・This is the first time I was starting the piece without being able to look at the person giving the cue. The waiting for the team, the ま（間）concept is also something I will take use of.	合図を見ないで始める，間のコンセプトの活用
	65	・I'm not sure but after speaking with Miyazaki sensei about the mindset of the composer of one of my solo pieces, I feel like I understand what his intentions were more.	指導者との交流，作曲者の考え方，意図の理解
	66	・I learnt to pay more attention to the space between notes for solo playing.	音と音との間のスペース，注意を払う
	67	・I have got more familiar with koto.	箏，より親しみを感じる
13	68	・I would like to be more of the playing techniques as well as the synchronization with the other performers.	演奏技術，他の演奏者とのシンクロナイゼーションをもっと身につける

	69	・Memorizing every piece, more stage confidence, and attitude, team work.	全ての曲の暗記，ステージでの自信，姿勢，チームワークを身につける
	70	・I would like to be more confident and less nervous.	自信を持つ，緊張しない
	71	・I hope to have more discipline in learning the instrument, and I hope that I would become aware to my sound as a player.	楽器を学ぶ上で規律を守る，演奏者として，自分の音に気づく
	72	・To pay more attention to technique and better express the song's feeling.	テクニックに注意を払う，曲の感情をよりよく表現
	73	・I would like to be more confident at stage.	ステージ，もっと自信を持つ
	74	・Technique and the quality of sound I am producing, finger posture.	テクニック，自分の出す音，指の姿勢（構え方）
	75	・Be sure do not rush and make sure I'm not being a bother do others.	焦らない，他の人に迷惑をかけない
	76	・Deeper understanding of 間	間を深く理解する
	77	・I will probably teach the other members of our Koto. Ensemble the proper way to evacuate or do things.	他のメンバーに教える，うまく調整できる方法．
	78	・I would like to continue learning more by coming to Japan and exchanging with other performers from other countries.	他の国の演奏者との交流，学び続けたい
	79	・I would like to understand the composer's intentions and the imagery they want for the piece. I find that it deepends my understanding of the piece.	作曲者の意図や曲に込めたイメージの理解，曲に対する理解の深まり
	80	・How to signal, How to breath together as ensemble	合図の仕方，アンサンブル，一緒に呼吸する方法
14	81	・Please continues doing and organizing such wonderful event. It is a wonderful way not just to showcase talents, but also bridge the gap between koto players around the world.	素晴らしいイベント，才能を披露，世界中の箏奏者，橋渡し
	82	・Please more shamisen! And shakuhachi.	三味線，尺八
	83	・I hope there will be shakuhachi performances next year! Thank you to all the staff for your hard work!	尺八，スタッフの皆さん，お疲れ様でした
	84	・This Festival made me feel more inspired to learn the Koto, be more discipline to my playing, and be a role model to future players. I hope that these festivals would happen again in the future.	箏を学ぶ，規律のある演奏，将来の奏者の規範，気持ちが高まる，将来の開催に期待
	85	・Thank you so much for organizing such a wonderful festival.	素晴らしいフェスティバルの企画，ありがとうございます
	86	・I would like to participate in another festival.	フェスティバルに参加したい
	87	・I enjoyed the festival but wish we world have more time to get ready and practice together.	楽しかった，一緒に準備し練習する時間が必要
	88	・Please have a proper waiting room for performers. Label the instruments more, have an organized system to track when and where to store the instruments in between performances so there will be NO mix-ups or lost instruments accessories mid-show. Prepare water for the performer's backstage. Have an official translator for the show. Always have an English version of the instructions.	出演者用の適切な待合室の準備，楽器のラベル付，保管の場所，整理されたシステムの必要性，出演者用の水の準備，公式通訳の必要性，英語版の説明書
	89	・Please make sure to communicate details properly.	詳細を伝えてほしい

いることに関心を持ち，その高い技術と糸を弾く音の質の良さ（アーティキュレーション）を評価している（ID:39，40）。また，異文化圏の演奏者が日本音楽を演奏することは，独自のスタイルも生まれているという気づきを得ていることが分かる（ID:44）。

② 和楽器音楽の本質の理解（波線）

日本の箏曲家である指導者の演奏を間近に見ることができ，楽しかったという率直な記述がある。このような経験を通じて，自身の演奏に対する意識が高まったと感じている可能性がある（ID:45）。さらに貴重な合奏での経験は，協調や他の演奏者との連携についての気づきが見られたとの記述が抽出された。学生は，個々の演奏技術だけでなく，作品に込められた作曲者の意図を理解する重要性を感じ，それが演奏に深みを与えるのであろうと認識している（ID:65, 79）。また「六段の調」などの演奏を通して，以前の自分の演奏スタイルがより落ち着き，解釈が変わったと感じている（ID:57）。多くの学生が自分の演奏技術を向上させたいと感じており，特に日本音楽特有の「間」や音程，呼吸，指のポジションなどの細かな技術に注意を払うようになっている。演奏のスタイルの違いに触れているが，学生は異なるスタイルや技術の違いがある中で，共通の目標（個人の演奏や合奏）を指揮者なく演奏するためには，調整や理解が必要であることに気づいている（ID:64，77）。

③ 演奏者としての学びと成長に対する意識（点線）

学生は演奏において，呼吸やリズムの重要性をより深く理解し，技術の向上を実感している記述が見られる（ID:55，56，57，76，80）。このように，細

かな演奏技術（呼吸，リズム）を意識するようになったということが，演奏の質を高めることに繋がっていると言えるであろう。加えて「より優しく演奏するようになった」（ID:61），「技術にもっと注意を払い，曲の感情をより良く表現したい」（ID:58，60，62，71）といった奏法に対する意識が変わったことが示されている。このような意図的な演奏スタイルや奏法の変化は，演奏者としての表現力が向上したことを示唆している。また，ワークショップやリハーサルでの学びを実際の演奏に活かすことができた（ID:54）という点や，技術的な向上だけでなく，表現力を深めることに対する意欲が高まったこと（ID:58，72，73）が成長の気づきとして挙げられている。今回の機会において，学生は演奏技術や表現に関わる意識的な変化を経験しており，自己の改善を目指していた。これらの気づきからも作品の技術や表現力を深めたいという意欲が感じられる。

Ⅴ．総合考察

本稿では，「おかやま国際和楽器学生フェスティバル」の実践における「異文化間能力」育成の可能性について，質問紙調査の分析から検討を進めてきた。

表２に示した「異文化間能力」検証の４つの視点に基づき考察したい。

第一に，「和楽器音楽における文化的多様性」についてである。国内の学生においては，和楽器が越境文化として異文化圏でどのように受け入れられ学ばれ変化しているのかについての認識の広がりが示されている。回答には，学生たちが音楽による文化交流を通じてどのように自己の成長を実感し文化的背景と演奏技術がどのように融合していくのかが記述された。

一方で，海外の学生たちは，日本の伝統音楽を学ぶ過程で，いわゆる正統的日本音楽の側面から演奏技術や表現方法，また楽曲の解釈を学ぶことで，自己の成長を実感していたことが窺えた。

第二に，「国外での和楽器音楽教育と学習に対する理解と国内の邦楽における絶対的正統性の緩和」についてであった。学生たちは異なる演奏スタイルや技術に対する理解を深め和楽器音楽の多様性を受け入れていた。具体的には指導者や流派による解釈の違いに触れることで，伝統的な音楽教育における「正統性」の緩和が進んでおり，学生には，より柔軟で且つ寛容な和楽器との向き合い方が形成されていたと言えよう。

第三に，「共感と協調のスキルがどのように形成され，あるいは変化したか」についてである。質問紙調査では，和楽器を通じた協働の場で学生が共感と協調のスキルをどのように形成し変化させたかが明確に示された。「大人数の中でも音質や技法姿勢にこだわって練習していきたい」という日本の学生による記述は，共演を通じて他の演奏者から学び合い音楽的な技術や演奏態度に対する意識が高まったことを示している。また，一般的に，和楽器は個人でのスキルアップが効果的であるものの，共演の中で生まれる共感と協調のスキルは，音楽をより深く理解し合うために重要であり，この経験は参加者の演奏技術にも良い影響を与えることが示唆される。

第四の「世界についての体系的知識と批判的理解，さらには将来的な知識取得と理解力開発へのモティベーションがどのように形成され，あるいは変化したか」については，学生が演奏技術や表現力の向上だけでなく批判的理解を通じて，音楽や文化に対する深い洞察を得ていることが記述から読み取れた。この結果から，異なる国や文化との接触を通じて和楽器音楽に対する理解が広がり国際的な視野が形成され，今後の学習や知識獲得への意欲が高まったことが伺える。つまり，異文化交流を通じて得られた知識は学生たちの学びに対するアプローチや意識を変化させ音楽だけでなく，その他の分野への探求心や知識開発にも繋がることが考えられる。そして，越境文化による交流の場は，音楽や文化に対する批判的な視点を育みさらなる学びを促進する効果的な方法であると考えられ，和楽器による国際交流の経験が参加者に与えた影響は，世界に対する体系的な知識の形成，批判的な理解の深化，そして将来的な学びに対するモチベーションを高める重要な契機となったことが窺える。

これらの気づきに関する記述は，和楽器音楽のグローバルな発展に寄与し，日本国内の邦楽においても新たな視点を提供するものであった。ひいては，海外での和楽器教育や学習が進む中で，国内の邦楽における「絶対的正統性」の在り方に示唆を与えるものであり，和楽器音楽がより多様で開かれた文化として受け入れられるようになっていくことが，日本における今後の課題であると言えよう。このような交流の場は今後も和楽器音楽の発展において重要な役割を果たすことが期待され，特に国内の邦楽における正統性の枠組みの再評価が求められる。

今回は，国内外の学生を対象とした質問紙調査のうち，「異文化間能力」に関わる自由記述の分析にとどまっている。今後は，追跡調査により本フェスティバルでの経験が，日常の和楽器との関わり方・学び方に変化をもたらしているのかどうか，また指導者らはそうした学生の変化をどのように見取って

いるのか，研究を進めていきたい。

－謝　辞－

本研究は，公益財団法人両備檉園記念財団，三井住友海上文化財団，福武教育文化振興財団の助成，おかやま県民文化祭の補助金を受けています。また，一般社団法人全国邦楽器連合会のご協力をいただいております。

本実践研究推進にあたって，フィリピン大学永井博子氏，シンガポール国立大学北井佐枝子氏，ジャンティイー公立音楽院みやざきみえこ氏のご協力に御礼申し上げます。

－注－

1．Byramの「異文化間能力」モデル（A Model for Intercultural Communicative Competence）については，2021年の著書では，「異文化間能力」を先述の５つと定義づけ,「異文化間コミュニケーション能力」を「言語能力」,「社会言語能力」,「談話能力」の言語コミュニケーションに関する能力で構成している。

－文　献－

Byram, M. (1997). *Teaching and assessing intercultural communicative competence*. Clevendon: Multilingual Matters.

Byram, M. (2021). *Teaching and assessing intercultural communicative competence: Revisited*. Multilingual Matters.

Council of Europe (2018). *Reference framework of competences for democratic culture: Volume 1 context, concepts and model*. from https://rm.coe.int/prems-008318- gbr-2508-reference-framework-of-competences-vol-1-8573-co/16807bc66c（最終閲覧：2024/11/18）

Deardorff, D.K. (2006). The identification and assessment of intercultural competence as a student outcome of internationalization at institutions of higher education in the United States. *Journal of Studies in International Education*, 10 (3), pp.241-266

Deardorff, D.K.& Arasaratnam-Smith, L. (2017). *Intercultural Competence in Higher Education (Internationalization in Higher Education Series)*, Routledge

エドワード・T・ホール，近藤春菜訳（1993）『文化のコンテクスト』，みすず書房

早川倫子他（2025予定）「地域社会とグローバルをつなぐ和楽器音楽次世代育成の実践研究（１）―『おかやま国際和楽器学生フェスティバル』外的評価の分析―」，『岡山大学教師教育開発センター紀要』第15号（提出済み）

稲葉みどり（2023）「教員養成過程の大学生の異文化間能力を探る―異文化知識と異文化意識―」愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科『教科開発学論集』第11号，pp.21-30

石﨑俊子（2023）「ケース学習による異文化間能力の達成度の演繹的分析による検証」『名古屋大学日本語・日本文化論集』第30号，pp.1-15

神谷順子・中川かず子（2007）「異文化接触による相互の意識変容に関する研究―留学生・日本人学生の協働的活動がもたらす双方向的効果―」『北海学園大学学園論集』134，pp.1-17

文部科学省（2012）「資料２ グローバル人材の育成について」from https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryo/__icsFiles/afieldfile/2012/02/14/1316067_01.pdf（最終閲覧: 2024/11/18）

中尾元（2019）「異文化間能力の前提，資質の類型と実証的課題―これまでの枠組みと今後の展望について―」『異文化間教育』50，pp.111-123

中尾元・渡部文夫他（2023）『異文化間能力研究―異なる文化システムとの事例分析』新曜社

櫻井省吾･宮本真有･近藤行人･近藤有美（2021）「欧州評議会の『民主的な文化への能力と135項目のキーディスクリプター』の邦訳」『名古屋外国語大学論集』第８号，pp.353-367